

東京国税局管内納税貯蓄組合連合会優秀賞

「成長する税制度」

足立区立 東綾瀬中学校

三年 瀬尾 柚葉

父の書棚に「税金を払う人は馬鹿」と書かれたタイトルの本を見つけた。私は夏休みの宿題を思い出し飛びついて読みだしたが、節税の指南本のように、倒産防止とか中退共、法人を作れとか、専門的な言葉も多くとっつきづらくて読むのをやめてしまった。

ただ社会の仕組みとして、サラリーマンに対する課税はガチガチで逃げられず、経営者に有利な制度になっていること。また節税の制度（しくみ）は大きく社会告知されることなく、面倒な申告が必要、だからこそ自らが知りに行く努力が必要であることなどが書かれていた。

しかし私は父が毎年ふるさと納税をしていることは知っている。CMもみる。毎年、家族で返礼品を見ながらどの自治体に寄付するか話しており、別に面倒な手続きをしている様子もないことから矛盾を感じた。

そもそも税とはなんだろう。物を買っても売ってもかかるもの。タバコは税金を燃やしている。酒税はアルコール濃度で違う。三代で資産を失うという相続税の格言。消費税でお小遣いの減りが速い。でも海外と商売をしている会社は還付金のスキームを使って節税できるらしい。インボイスという課税漏れを防止する仕組みができたこと。私が知る限りの知識はこの程度しかない。

それでも大儀としては税金を徴収されることは社会インフラの

整備や医療費、復興などなくてはならないものであることは承知している。ただ残念なことに諸外国に比べ費用対効果が少ないように思う。北欧の三か国のような透明で充実した運用はできないのであろうか？

日本は豊かな国であり予算も大きいのになぜ充実した社会保障制度にできないのかと父に聞いてみた。父は可能性としてだがと前置きをした上で、制度の盲点を突き過度に恩恵をうけている人がいること、利権団体の中抜き、数の暴力が凝り固まり変化の足を引っ張っている可能性があり時には社会主義的なトップダウンも必要かもなど、笑いながら話し、「人災だな。虚構の幸せに隠され、国民は安穩とした生活の中で懐柔されている」とおちやらけて会社に行ってしまった。

私は父の話すことも理解するが、豪族が私服を肥やしていた時代の祖とは違う。超高齢社会を迎え納税の在り方も時代に合わせ変わってくるであろう。少なくともわかりづらかった税というもの、ふるさと納税の仕組みから身近なものとなり、またニュースで流れていたインボイスの反対運動は制度の正しい理解や疑問点に気づく告知がなされているから起こっているのではないかと思う。変化は起きている。私は現時点で消費税の納税しかしていないが、日本の課税制度を信じていきたいと思う。